

篠山城採石場

—近畿自動車道舞鶴線関係文化財調査報告IX—

1988.3

兵庫県教育委員会

例　　言

1. 本書は、近畿自動車道舞鶴線（現在は舞鶴自動車道に改称）建設に伴う多紀郡丹南町当野・栗栖野・古森に所在する篠山城採石場の調査報告書である。
2. 現地調査および整理調査は、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて兵庫県教育委員会が実施した。分布調査を53・55・59年度に行い、60～62年度に拓本作業や測量などの調査を実施した。
3. 調査は、兵庫県教育委員会が調査主体となり、社会教育・文化財調査技術職員　波辺　昇が担当した。
4. 分布調査については、日本道路公団の1000分の1の図面を基本原図としたが、部分的に丹南町作成の3000分の1も使用した。
5. 現地写真は、調査員が撮影したが、空中写真については、国土地理院およびアジア航測株式会社撮影のもとのを使用した。
6. 整理調査は、昭和62年度に兵庫県埋蔵文化財調査事務所で実施した。
7. 篠山文庫朽木史郎氏からⅡ章の玉稿を戴いた。
8. 表紙見返しは兵庫県立歴史博物館蔵『石曳図屏風』（部分）である。
9. 本報告にかかるスライドなどの資料は、兵庫県埋蔵文化財調査事務所で保管している。



丹南町の位置

篠山城採石場

本文目次

例　　言

I. はじめに

1. 調査に至る経緯	1
2. 現地調査の経過	2
3. 整理調査の経過	4

II. 篠山篠城とその採石場	5
----------------	---

III. 調査結果

1. 草野丁場	14
2. 古森丁場	16
3. 当野丁場	18
4. 果樹野丁場	23
IV. おわりに	26

表　　目　　次

第1表 助役大名一覧表

第2表 篠山城関係略年表

第3表 篠山城石垣・採石場刻印一覧表

図版目次

- 図版1 (上) 雜山城採石場遠景(北から)
(下) 雜山城採石場遠景(南から)
- 図版2 (上) 草野丁場(西から)
(中) 草野丁場(現況、南から)
(下) 草野丁場 石材の露頭
- 図版3 草野丁場 石材散布状況
- 図版4 (上) 古森丁場 空中写真
(下) 古森丁場 石材散布状態
- 図版5 (上) 当野丁場 中山支群・下山支群空中写真
(下) 当野丁場 下山支群全景
- 図版6 (上) 当野丁場 中山支群近景
(下) 当野丁場 中山支群調査石
- 図版7 (上) 中谷川・牠円寺支群空中写真
(下) 中谷川支群 石材散布状態
- 図版8 (上) 牠円寺支群 遠景
(下) 中谷川支群 板用石材
- 図版9 (上) 西紀サービスエリア石材展示風景
(中) 路線内石材 (1)(2)
(下) 西紀サービスエリア石垣石材の矢穴
- 図版10 (上) 路線内石材 (4)
(中) 路線内石材 (5)
(下) 中谷川支群 石材
- 図版11 中谷川支群 石材
- 図版12 (上左) 路線内石材 (1)
(上中) 路線内石材 (4)
(中) 路線内石材 (8)
(下) 路線内石材 (2)
- 図版13 中谷川支群 刻印石
- 図版14 丹南町川代体育馆庭に移動された石材
- 図版15 (上) 栗柄野丁場空中写真
(下) 栗柄野丁場 刻印
- 図版16 (上) 栗柄野丁場 近景
(下) 栗柄野丁場 板用石材
- 図版17 雜山城石垣の刻印
- 図版18 雜山城石垣の刻印

挿図目次

- 第1図 調査風景
- 第2図 調査風景
- 第3図 刻印石・矢穴石集石状況
- 第4図 刻印石の展示（西紀サービスエリア）
- 第5図 刻印石の複製（西紀サービスエリア）
- 第6図 調査風景
- 第7図 山内家史料（一部）
- 第8図 雄山城の符号
- 第9図 雄山城と雄山城採石場の位置
- 第10図 雄山城採石場の位置
- 第11図 草野丁場分布状況
- 第12図 古森丁場分布状況
- 第13図 当野丁場中山支群・下山支群
- 第14図 当野丁場中谷川支群分布状況
- 第15図 当野丁場近畿自動車道路線内石材拓本
- 第16図 中谷川支群刻印拓本
- 第17図 当野丁場鎌円寺支群分布状況
- 第18図 東橋野丁場分布状況
- 第19図 東橋野丁場刻印拓本
- 第20図 雄山城とその採石場
- 第21図 雄山城跡石垣の位置
- 第22図 雄山城跡の石垣の刻印拓本(1)
- 第23図 雄山城跡の石垣の刻印拓本(2)
- 第24図 雄山城跡の石垣の刻印拓本(3)
- 第25図 調査風景
- 第26図 波賀野丁場の龍頭
- 第27図 波賀野丁場刻印石
- 第28図 波賀野丁場刻印石拓本
- 第29図 波賀野丁場矢穴石・割石

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

近畿自動車道舞鶴線（現在は、舞鶴自動車道に改称）は、名神自動車道・山陽自動車道や中國自動車道など列島を横断する高速自動車道に対して横断する高架橋の一つとして、計画されたものである。ほぼ、同時に計画・施工されている本州四国連絡道（後路幹道）とともに兵庫県の新しい交通体系となるもので、丹波地域の活性化が期待される事業である。

近畿自動車道舞鶴線は、美濃郡吉川町企で中国自動車道と分岐し（吉川ジャンクション）三田市・丹南町・西紀町を北進し、多紀連山トンネルを抜けて氷上郡春日町・市島町を通り、京都府に入り舞鶴市に至る総延長76kmの高速自動車道である。現在、丹南インター～福知山インターラン31.1kmが使用を開始している。兵庫県下は、1市5町の約45kmを通過している。昭和48年の整備計画後、事前の協議を行い、昭和52年の路線発表の後は、具体的な協議を重ね、昭和53年度に日出坂以北の丹波地域の、昭和54年度に日出坂以南の揖良地域の全線分布調査を実施した。その後、未賄取地域などの補足調査や部分的な詳細分布調査を実施している。

昭和53年度の第1次の分布調査では、篠山城採石場は確認されなかつたが、丹南町古森の稻荷神社横の路線外で刻印石が確認されている。昭和55年4月の西紀町下板井周辺の分布調査の際、篠山城採石場が路線内に入っていることが判り、No.23地点『篠山城石切場』として協議の俎上に上げられることになった。分布調査終了とともに調査依頼が日本道路公団大阪建設局から兵庫県教育委員会へあり、昭和56年度から発掘調査が開始された。丹南インター・チエンジ内の杉・西吹両遺跡を皮切りに年々調査量は増加し、昭和59年度に至っては半数以上の職員が近畿自動車道舞鶴線の調査に従事したことになる。『篠山城石切場』も昭和58年度から調査依頼を受けていたが、西紀・丹南町教育委員会によって史跡に指定されている遺跡であった。現地にも立て看板があり、別に篠山城城壁の看板も見られる。昭和35年刊行の『篠山城刻印の研究』にも当野周辺の石切場のことは記されている周知の遺跡であった。そのため、指定問題について協議することになり、昭和58年度の調査は見送られた。西紀・丹南町教育委員会で、『篠山城石切場』について検討されたが、面的な広がりを持つ遺跡で詳細な資料がないことから、その資料の提出を持って再度検討することとなった。調査方法を考慮する上でも必要なことから昭和59年度に詳細分布調査を行うことになった。分布調査は、昭和60年1月16日の庄原1号墳の調査開始から昭和60年3月8日の萩ノ尾1号窓の調査終了までの期間の間に実施した。その結果、面的な広がりを確認し、谷部・山腹全域に石材が散乱しており、中谷川などの谷部を中心に採取していることが判った。採取状況は、露岩や散乱している石材から採取するもので、岩脈から切り出していないことが明らかとなつた。そのため、「石切場」でなく「採

石場」の方が妥当と思われたので、『椎山城採石場』と呼称することにした。

昭和60年度になって、前年度の分布調査結果などから西紀・丹南町教育委員会で、『椎山城石切場』の取扱いについて協議された。面的に広がっており、根本的なルート変更以外ルート変更による保存策の可能性は見出されなかった。また、谷部・丘陵部の起伏のある地形の全域に跨がっているため、工法変更も不可能であった。それらを考慮して、町指定の部分解禁を行うことになった。担当者が昭和60年度事務担当となつたため、年度内の可能な時期や工事の進捗状況に併せて陸上調査を行った。調査は、詳細分布調査と刻印石・矢穴石の拓本・計測作業を行つた。関連工事として、当野川の河川改修や町道などの整備も行われたため、周辺も対象とした。

刻印石・矢穴石については、昭和61年度に近畿自動車道舞鶴線西紀サービスエリア内に移動し、説明板を設けて活用を図っている。また、分布調査などで確認した刻印石で路線外のものは西紀・丹南町教育委員会によって、丹南町立川代体育館で保管されている。

2. 現地調査の経過

① 昭和59年度分布調査の経過

近畿自動車道舞鶴線に伴う調査である庄塙1号墳・萩ノ尾1号窓の調査期間中に適宜分布調査を実施した。冬季で分布調査には適した季節であったが、現地は下草が繁茂した状態で石材を確認するのに苦労した箇所も多い。また、調査対象地が広いこともあり、細密な調査を後日にした部分もある。調査手段等では、「椎山城採石場」は丹南町当野・栗柄野周辺と考えていたが、実際に分布調査を実施していくと、三田市との市境付近から国道372号線までの6.3kmに及ぶ広大な部分が対象となった。しかし、三田市市境付近の丹南町古森では、すでに近畿自動車道の本体工事の掘削が始まっており、十分な調査は行えなかつたが、逆に表土下の石材まで観察することが出来た。その結果、密度は高くないものの矢穴の残された石材が確認され、確実に「椎山城採石場」が延びていることが明らかになった。古森から当野に至る武庫川上流部の谷部の斜面も同様に希薄な分布ながら、矢穴石が確認されていたが、すでに本体工事が行われていたため、今年度に調査を実施した。

明らかな関係石材は、1カ所に集める作業と計測などの調査を行つた。刻印は確認されなかつた。

また、栗柄野についても分布調査の結果、路線内に矢穴石をはじめ刻印石など関係石材が確認されなかつたため、調査を終了した。

調査の組織

発掘調査・整理調査とともに日本道路公団大



第1回 調査風景

阪建設局の委託を受けて、兵庫県教育委員会が調査主体となって調査を実施した。調査事務は社会教育・文化財課が行った。

社会教育・文化財課 課長 西澤 良之
参考 大西 章夫

埋蔵文化財調査係長 横本 誠一
技術職員 渡辺 昇

③ 昭和60年度現地調査の経過

昭和60年度は、昨年度実施した分布調査の結果を踏まえて、当野を中心とした詳細分布調査を実施した。また、昨年度協議に上がっていないかった工事用道路ならびに漁港改修部分についても、新たに調査を行った。関係石材の分布を図に落とし、計測作業を行った。工事用道路とともに中谷川の河川改修も行われ、「檍山城採石場」の調査は河川改修については、西紀・丹南町教育委員会によって実施された。



第2図 調査風景

調査の組織

社会教育・文化財課 課長 北村 幸久
参考事務官 球崎 理一
埋蔵文化財調査係長 横本 誠一

技術職員 渡辺 昇
調査補助員 森岡みゆき
〃 岡村真理子

④ 昭和61年度現地調査の経過

調査は、分布調査と現地での現状写真撮影・石材の計測作業などであるが、対象が岩・石の巨大なもので、人力では対応できないことも多々あった。そのため、本体工事に即して重機を使用して観察することの出来ない石材の裏面(底面)の観察を行った。また、関係石材について、本体工事で紛失しないよう1カ所に集めて管理した。昭和60年度実施した工事用道路部分の石材も同様に工事関係者に管理をお願いした。

その後の協議で、石材は西紀サービスエリア内に公開展示して保管することになり、当野の石材集中地から移動した。その際に石材の側面で新たに刻印を確認した。公開展示のための石材の有効な方向・位置などについて数度、協議を行った。



第3図 刻印石・矢穴石無石状況

調査の組織

社会教育・文化財課 課長 北村 幸久

参事 森崎 理一

課長補佐兼
埋蔵文化財調査係長 大村 敏通

技術職員 渡辺 昇

3. 整理調査の経過

分布調査の結果、石材の集積場や作業場の推定は出来るものの確認するまでは至らず、発掘調査は実施されなかった。分布調査でも遺物の採取は行えなかったため、埋蔵文化財の調査とは趣を異にしている。現地で調査した拓本の裏打ち作業から始め、石材の計測値の整理から原稿執筆・報告書作成作業までを昭和62年度の単年度で実施した。整理調査に際しては、現地調査でも指導戴いた朽木史郎氏に多くの教示を得た上に、篠山城の歴史と刻印の意義についての玉藻を戴いた。整理調査は、兵庫県埋蔵文化財調査事務所で行ったが、篠山城との関連が考案されたので、一部現地調査も行った。また、昭和61年度西紀サービスエリア内に搬入した石材に刻印を確認したものについての作業も現地で行った。昭和61年度は、近畿自動車道新鶴線の福知山～丹南篠山ローター間の部分使用のため、西紀サービスエリアの工事が迫り調査の余裕がなく後日でも作業が可能であることから昭和62年度に調査を行った。

調査の組織

社会教育・文化財課 課長 北村 幸久

参事 森崎 理一

課長補佐兼
埋蔵文化財調査係長 大村 敏通

主任 渡辺 昇

調査補助員 国村真理子

小川真理子

伴 悅子



第4図 刻印石の展示(西紀サービスエリア)



第5図 刻印石の複製(西紀サービスエリア)



第6図 調査風景

II.は公開していません

III. 調査結果

昭和59年度の分布調査は、三田市との町境から近畿自動車道舞鶴線と国道372号線と国道の交点までを対象とした。ただ、古森・草野地域は本体工事が始められており、その段階で現地を踏査したが、矢穴石をはじめ築城に伴うと思われた石材は確認されなかった。ただ、草野の稻荷神社横の路線外に1石のみ刻印石があり、採石場の広がりの可能性は考えられる。当野地域では漁池改修に伴う部分も対象としており、路線外も分布調査を実施した。

路線内5.2kmの調査の結果、大規模な石切場は確認されず、岩脈から切り出しているようである。露岩を採石したり、露頭した岩を切り出し採取したものと思われる。

矢穴石の分布は古森から栗栖野の全域に見られる。しかし稠密な分布は示さず、稀薄な分布状況を示している。分布の中心は当野の中谷川の谷奥部にあるようである。近畿自動車道舞鶴線路線内は、分布地帯の平面的な中間地域に該当し、最も分布度の低い地域と言える。谷奥部の採石地点と支川合流点や山麓などの石材集積場の中間に相当するためと思われる。矢穴は全て、大型のタイプで幅15cmを越えるものが大半である。

刻印石は路線内では見られず、工事用道路で1ヶ所、漁池改修部分で2ヶ所確認しており、当野に限られる。他に刻印は、草野で1石、当野で5石、栗栖野で1石確認している。朽木史郎氏の「播磨山城石垣符号の研究」では当野に12石確認されており、激減していることが指摘出来る。刻印石は、全て調査石などの移動した石材で、露岩には今のところ認められない。

刻印石の分布状況から、草野・古森・当野・栗栖野の4地域で採石されており、当野は地形的に4支群に細分可能である。以下、地区ごとに概観していく。丁場・支群分けは地理的な要因から分けたもので、助役大名の丁場とか歴史性があるものではない。

1. 草野丁場

丹南町の南端部分で日出版峠を越えると三田市になり、丹波国から摂津国への国境に接した地域である。播磨山系の南端部になる。現在は丹南町草野である。山内東文書では、今回対象とした全ての地域を「油井谷」と称していることからも、採石場入口部の草野・古森も含めて油井と統称されていた可能性が高い。油井は油井石の産地であり、後日築城関係の石材が確認されるかもしれないでの、油井の名称の使用は避けることにした。

標高519mを測る山の西斜面にあたり、山頂近くまで広がらず山麓部が採石地である。山頂近くでも露岩は見られるが矢穴などの痕跡は見られない。地形的に考えると、国境となる日出版峠まで広がっていたものと予想されるが、現状では石材は確認していない。武庫川本流も近時の河川改修で護岸工事が行われ、旧状を彷彿とすることは出来ない。周辺を含めて現在は

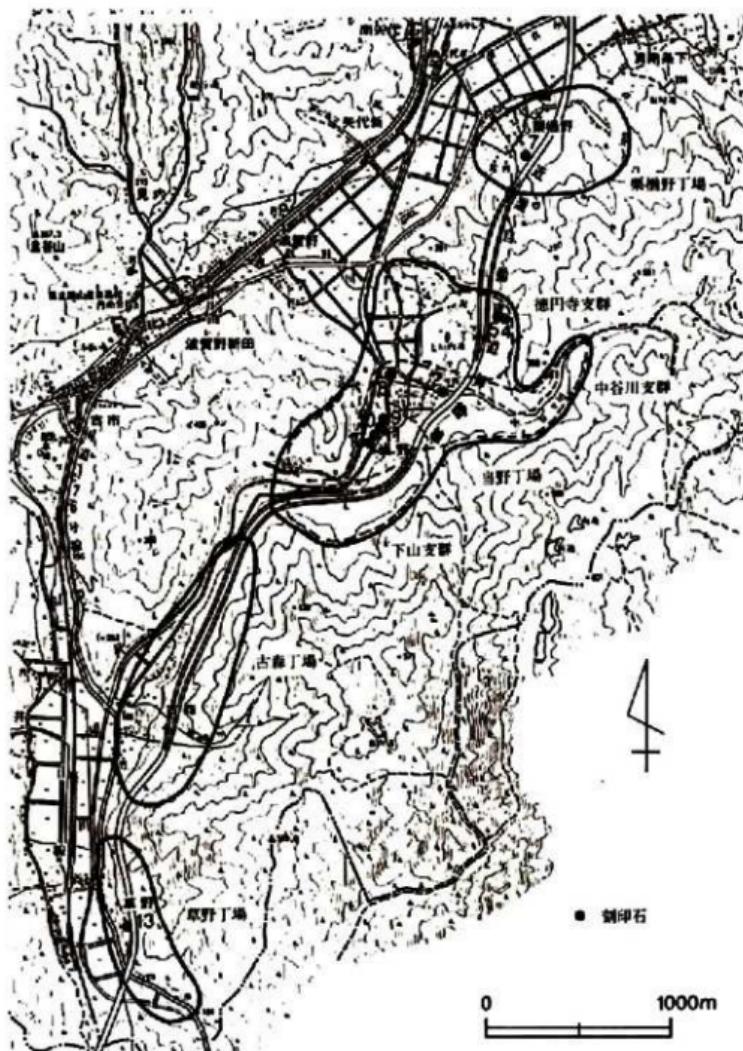


図 10 図
高野山城採石場の位置と刻印石
(数字は刻印石、同一番号を使用)



第11図 草野丁場分布状況 刻印石・矢穴石

石材は全く認められない。斜面は比較的緩やかな地形であり、矢穴を確認した地点は2地点だけであるが、より傾斜が緩やかであった。古森丁場や当野丁場支群に比べると緩やかな斜面である。丁場の広がりは1km以上の長さになるが、分布状態は非常に稀薄で、石材の集石もほとんど見られない。自動車道路線上では大形の石材が見られたが、路線内から下方ではほとんど見られなかった。福荷神社周辺で0.5~0.8mの長さの石材がやや集中して散乱している。

関係石材は2点だけである。刻印石1石と矢穴石1石である。刻印石は昭和54年度の分布調査で確認されているが、再度確認に赴いたが確認出来なかった。そのため、地点を当時の画面から落としたものである。④の刻印石である。矢穴石は、最大長1.2mとやや大形の石材で、矢穴が4穴以上穿たれている。矢穴の長さは11~12.5cmである。谷方向へ落とされた状況で移動中の石材の可能性が高い。

集城に開保する石材が2石と少ないとことから、丁場とするにはとまどいを感じたが、刻印石が存在することが丁場とした積極的な根拠である。また、矢穴石を1石しか確認していないが、石材の散布が見られ、石材として利用可能な薬岩が標高の高い地点で認められたことも肯定する資料となった。あくまで推定の範囲を越げないが、逆説的な論法が許されるならば、低い部分に薬岩や巨石がないのは石材が採取された理由とならないであろうか。

2. 古森丁場

標高580mの高山から延びる山麓の北西斜面であり、山麓は急な斜面で、他地区と比較すると岩石が散乱しており、採石場の状況を量している。0.5m前後の小型の石材から、3mに及

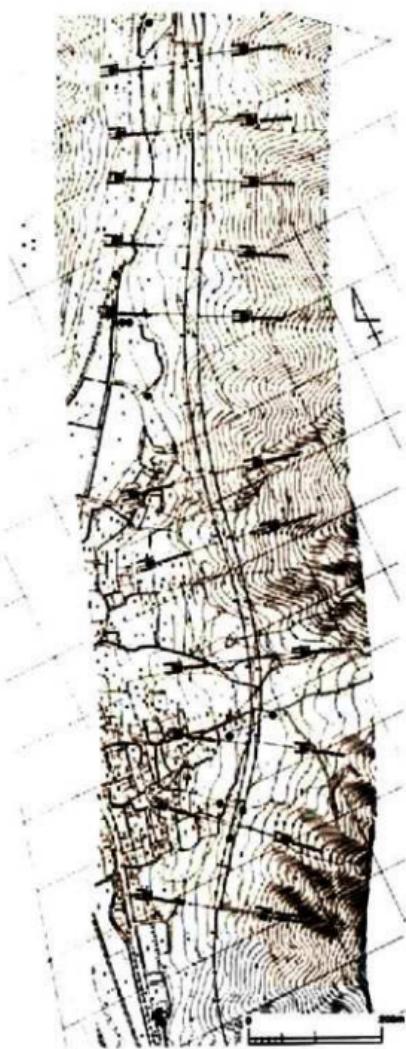


図12 古森丁場分布状況

が巨岩まで存在していた。矢穴が入れられているものは少なく、調整石になるような石材はほとんど見られなかった。矢穴の残された割石も14石確認したが、矢穴が見られる石は大形の石材に多い。今回の調査に限れば、2面以上に矢穴列を穿っている例は確認していない。また、矢穴石の集中部分ではなく、全体的に粗雑な分布を呈している。ただ、山裾に底石などとして集められている中にも矢穴が見られる。古森丁場の石材と即断定は出来ない遺跡資料であるが、可能性は残されている。他の丁場と異なり、現在は国道176号線という撤出の便の良い立地条件から、多くの石材が底石などとして採取されており、国道端に集石されている中にも築城石（残石）と考えられる矢穴の残った石材が確認されている。

石材の分布は粗である。集石されているところに1石調整石が見られる。他に矢穴石が14石確認されている。刻印石は1石も確認出来ず、調整石も原位置では認められなかった。分布密度も低いことから、中心的でなく周辺の採石場と考えられよう。矢穴は他の丁場や樅山城石垣と同じく、12~15mmの大形のものに限られる。

古森丁場は、長さ1.6km余りあり広範囲を占める。武庫川の支流である古森川によって開拓された谷筋では、樅山城関係の石材は確認していない。武庫川本流も田松川との合流点以南は、浚渫作業によるものかもしれないが築城石は見られない。広面積を古森丁場としたが、築城石の分布は山麓斜面に限定されており、大規模な丁場は考えにくいが、原位置で矢穴石・刻印石が残されていることは事実であり、小規模な採石場と思われる。

3. 当野丁場

最も広い部分で、採石の中心地域である。面積も広いことから、地形的に4支群に分けて考えた。あくまで地理的な理由から支群を分けたもので、歴史的な意味は全くない。小字名や支川名やその地点を代表する地名を名称とした。長さ1.8kmと広い範囲を占め、武庫川東西の山塊から採取している。栗柄野丁場との間の山間部にも多くの露岩や石材が見られるが、矢穴など確認出来なかったので、丁場から除外している。東方の標高の高い山頂近くも同様である。しかし、两者とも丁場でなかったとは断定は出来ず、可能性は残されている。

① 中山支群

油井谷と記された栗柄野～草野の採石場の中で、唯一の武庫川右岸の山塊である。標高406mの中山から延びた尾根の東端から南へ向かう支尾根の南斜面に位置する。365mの尾根東端部から南へやや尾根が延び、310mから200mの山裾まで急斜面となっている。当野周辺の採石場のなかでは最も急斜面の地形である。

西側へ小さな谷があるが、そこでは石材は確認していない。矢穴石・調整石は、この急斜面に集中している。谷を隔てた西側にも岩の露頭が多く見られる。山口橋周辺の武庫川（当野川）にも石材が見られる。

川の中の石材を除くと、中山支群の矢穴石は7石確認しており、調整石は1石（岩）認めら



第13図 当野丁場中山支群・下山支群分布状況 ●矢穴石 ○調整石

れる。古森丁場などのように小形の石でなく、大形の石材・露岩に矢穴が穿たれているのが特徴であろう。調査していないが、調整石として利用可能な大形の石材である。調整石として挙げたのは、山口橋上方の斜面中央付近にあり、矢穴列が5列以上あり、2つの隕石が2組取れるように穿たれている。中央で2石に割られた状態で放置されている。隕石にすると、 $90 \times 90 \times 170$ cmとなる。矢穴は全て 11.0~13.0cm の範囲に入るものである。調整石を含む大形の石材が多いわりに、刻印石がないことは、刻印を打つ時期を示すものではと思われる。

③ 下山支群

中山支群の対岸に位置している。右岸の中山支群と異なり、緩斜面に石材が所在している。東側は中谷川支群と接しており、現在の分布状況では空白があるが、支群分けが可能か問題点が残る。調査では、小さな流れのある谷で3石の矢穴石を確認しただけである。しかし、以前は調整石や刻印石もあったようである。下山墓地造成前に周辺で矢穴石・割石が見られたことからも明確であるが、大規模な採石地とは思われない。路線内で昭和59年度確認した2石の矢穴石も、翌年の調査時にはすでに失われており、石材の持ち出しが頻繁な地域である。人家から離れていることも、1つの要因かと思われる。

山口橋周辺の武庫川の河川敷内で3石の割石が残されているが、どちらの支群の石材かは不明としか言えない。全て、大形の石材ではない割石である。矢穴の大きさは、他の丁場・支群と同じく12~14cmの大きさである。朽木氏の調査によると④の刻印が確認されているが、現存しない。

④ 中谷川支群

当野周辺では、最も規模の大きい武庫川の支流である中谷川によって開拓された地域が中谷川支群である。上流部は採石状況の資料を我々に与えてくれ、武庫川合流点周辺は現在の当野集落の中心地となっており改変しているようだが、刻印石が見られ、刻印を刻む時期を想像させる。大半は中谷川の河川敷内や両岸斜面である。一部、南側の緩斜面上の雜木林の中にも矢穴石・割石が散布している。当野集落周辺の石材は全て原位置を移動している。

近畿自動車道路線より上流は、山が迫り開けた部分もほとんどなく、採石時の状況を彷彿とさせてくれる地域であった。矢穴石・調整石も多く見られ、2列以上に矢穴列が穿たれた石材も数多かった。露岩に穿たれた例も確認している。権山城集落の中心的な採石場と考えられたが、自動車道建設以外にも中谷川の砂防ダムの堰堤工事が昭和60年度行われ、様相を一変させている。堰堤上流部で僅かに残されているが、大半の石材は原位置を動かされたり、搬出されて所在不明である。59年度の分布調査で隕石の隕石を複数取れる調整石を確認していたが、詳細な調査を行わなかったことが残念である。全隕石を計測していないが、 $80 \times 80 \times 180$ cmの隕石であり、矢穴は12.5cm~14.0cmの大きさである。

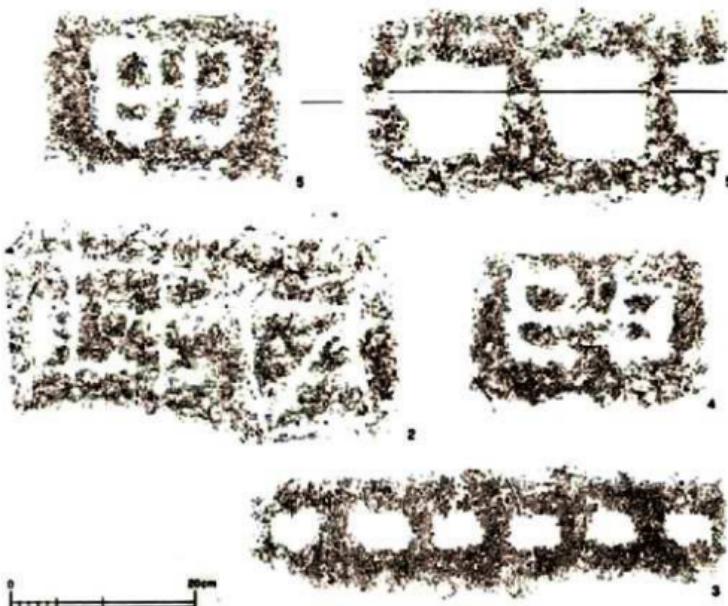
路線内では、中谷川の中で1石確認している。(第15図④)。長さ 115cm、幅 80cm の不定形



第14図 当野丁堀中谷川支幹分布状況

で厚さ30cmの扁平な石材で、上面中央から端に寄ったところに、横断的位置に6穴の矢穴が穿たれている。当野に限らず、周辺で全く確認していない小形の矢穴で、当然篠山城築城・補修には関係ないものである。小形の矢穴で新しい時期を示すものと思われ、唯一の例で価値があるものと思われる。矢穴の大きさは、長さ4.5cm、幅3cmで深さは2.5cm前後を測る。1ヶ所だけ2.5cm開けて掘られているが、他は4.0cm間隔である。矢穴列を上面に向けて川の流れの中に存在していた。

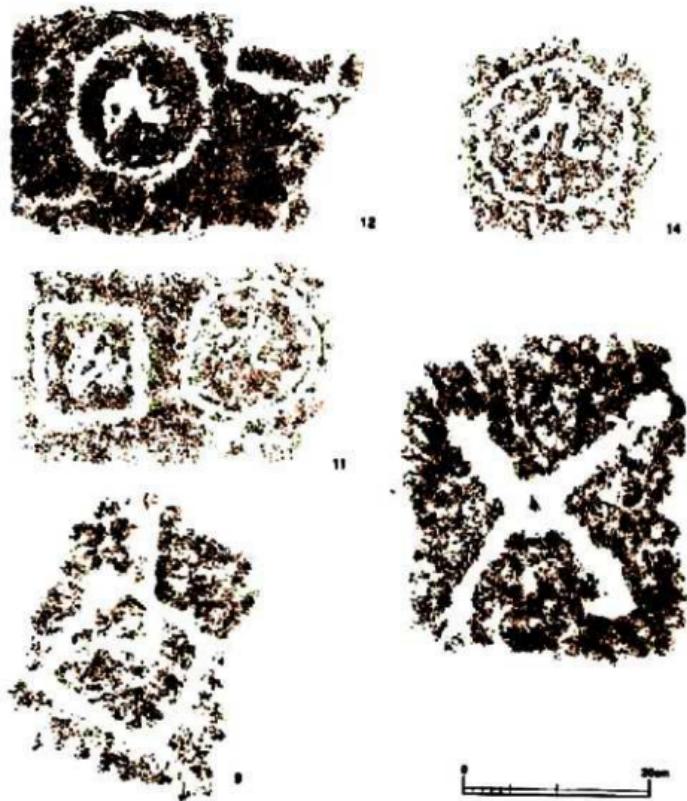
工事用道路建設に伴い、中谷川右岸の集落端で2石の矢穴石を確認し、Na(I)の石材同様、西紀サービスエリアに移動した。2石とも原位置とは思われないが、大きく移動しているとも思われない石材である。(2)は移動時に底になっていた面で刻印が確認された。下流のものを(I)、上流のものを(2)とした。(第14図参照)(I)は移動時に2石に破碎したもので、80×88cmで長さが130cmであった。木口面中央に1つの矢穴が開かれ、木口面の1辺に矢穴列が見られる。中央の矢穴は、2cm掘られた段階で放置されており、前後に続いていない。矢穴列は、長さ11cmで深さ10cm前後で、5穴設けられている。(2)は大形の石材で、長さ120cmを測り2辺に矢穴列が



第 15 図 当野丁場近傍曲輪跡地内石材拓本

見られる。断面は台形をしており、上辺35cm、下辺75cm、高さ65cmを測る。最も広い面に2種の刻印が彫られている。矢穴は長さ10~12cmで、1ヶ所のみ破砕面がずれたことにより幅がわかり、6cmを測る。深さは11cm前後である。刻印が彫られている面は平滑ではなく、凹凸のある面にやや浅く彫り込まれている。2種の刻印は四角系統のもので並んで打たれている。

当野集落の近傍にも5石の刻印石が残存していた。全て原位置を動かされ、底石などとして置かれている。002の2石は現在、西紀丹南町教育委員会によって川代体育馆庭に保管されている。ともに2種の刻印が1石に彫られているが、03は1種の一端が欠けている。2種の刻印がタイプが違うことが注目されるが、2石にあることから当然セットとして考えることも可能であろう。今回すでに失われていたが、朽木氏の以前の調査ではさらに9種の刻印が確認されている。また矢穴石・割石も今回以上に多く存在していたようである。築城以後現在に至るまで徐々に減少していったものであろう。中谷川支群で同じ刻印が複数確認されているのは2種だけである。



第16図 中谷川支群刻印拓本

(4) 徳円寺支群

当野丁場の中で最も北側に位置している支群で、面積的にも広い部分を占める。小字は複数にまたがるため、支群の中で最もその部分を代表する徳円寺を支群名とした。徳円寺の位置する東西に広く開けた緩やかな谷部とこの両端の支尾根から延びる緩斜面と母子へ抜ける間違の谷部、そして武庫川(当野川)によって開けた平地部を含んでいる。朽木氏の「猪山城石垣符号の研究」では最も多く刻印が確認されている地域であるが、現存している石材は僅少である。矢穴石も現存しないものが多い。その当時も石材は、茶畠の横や石垣に見られ、位置を変えているものが大半であった。その後の改良工事などで全て失われたものと思われる。石垣や池

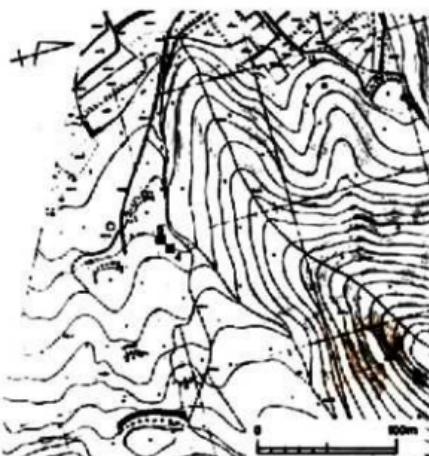
などの場にも石材があったと言われるが、今回の調査では確認出来なかった。

自動車道建設に伴った油池改修部分でも2石の石材を確認した(第15図(4)(5))。1石(4)は調査段階で刻印を認めたが、(5)は石材移動時に裏面で刻印を確認した。ともに同様の刻印が打たれている。(4)は木口面の1面が平坦でなく不定形であるが、5面は平坦面の直方体に近い形状である。72cm×72cmで長さ140cmを測る。2辺に矢穴列が残っている。1列はほとんど残っておらず、5cm幅の狭い数値が得られるが破砕状況によって幅が狭くなったり可能性もある。しかし、その数値が正しい

値なら時期差になるかもしれない。矢穴列の矢穴は他と同じく11~12cmの幅で深さは8cmを測る。刻印のある面は中央に石の筋目の段があり平坦にはなっていない。コーナーに近い端部に彫られている。(5)は(4)の手前に存在し、非常に緩やかな斜面に位置しており、底の面に刻印が見られ、刻印は移動時に確認された。台形断面の1面の角が取れた直方体に近い形状をしている。断面台形で、上辺50cm、下辺75cmで高さ60cmを測り、長さは125cmある。角の取れた部分は40cm余りあり、その辺は83cmを測る。断面台形の下辺にあたる部分の2辺に矢穴列が見られ、2辺の矢穴列のある面に直交する位置に矢穴が2ヶ所平行に穿たれている。矢穴は全て11~13cmと同様の幅である。2列の矢穴列は同方向の割り面に対するものでなく、打撃方向が90°異なる。矢穴列の間の面の2ヶの矢穴も同規格である。1ヶは深さはなく、かろうじて確認出来る程度の浅さである。最も広い面のコーナー近くに刻印が打たれている。(4)(5)の刻印石はともに大形で共通点がありそうである。刻印の打たれている位置に共通性があり、調査石にするには長さが不足している。刻印の打たれた位置は同じだが、刻印の方向は異なる。刻印を打つ際の石材の方向を示すものかもしれない。

(4)(5)の刻印石の西方の椎木林の中で調査石を確認している。2石以上の調査石が取れる大きさで矢穴列が3辺以上残っている。矢穴の大きさは、他と同じ11~13cmである。1石の大形石材を採取した後の状況である。調査出来る面には刻印が見えないが、刻印の存在を十分に想定出来る石材である。

徳円寺支群は広域で地形も異なる。そして過去に刻印石が多数確認されており、原位置に近



第17図 徳円寺支群分布状況



第18図 栗栖野丁場分布状況

い位置で新たに刻印石を確認している。その割に旧想を庶す散布は見られず、矢穴石も散少ないという特徴を持つ。刻印の性格を考えさせられる支群と言えないだろうか。

4. 栗栖野丁場

愛宕山山塊の西側に延びる支尾根の北斜面から、その支尾根の中間に開かれた小さな谷地形の縦断面が栗栖野丁場である。支尾根から国道372号線までの範囲で、支尾根の南を越えると当野丁場となる。谷部分は階段状に田畠が作られており、その石垣に築城石が散見される。支尾根上に墓碑や巨石が多く見られ、支尾根から採石して運んだことは明らかであるが、調査では矢穴石など確認出来なかった。

確認した石材は、原位置を移動したものばかりで、田畠や神社・家屋の石垣や基礎になって



第19図 栗栖野丁場刻印拓本

いる石材がほとんどである。刻印石1石と矢穴石11石を確認している。刻印は○で、円の径17cmと大型の部類に入る刻印である。矢穴は他と同じく、11~13cmの範囲に入るものである。支尾根上で矢穴を確かめられなかったが、存在する可能性は高いものと思われる。当野丁場ほど多数採石されなかつたかもしれないが、支尾根などの石材の豊富さや篠山城に最も近いことを考え合わせば、当野丁場に次ぐ規模の採石場だったと考えられる。



篠山城跡

IV. おわりに

篠山城採石場の存在を知ったのは、昭和54年度の年度末に近い頃である。その前に日出版社以南の三田市・吉川町の分布調査段階ではその存在を知らなかった。当時、明石城の発掘調査を終えて整理調査に入っていた頃で、石垣石材を主とする普請に興味を持っており、篠山城石切場についても自分の足で検討してみようと思い、当野の谷へ踏み入れたのが最初であった。そして、その市町指定となっている石切場に近畿自動車道のルートが予定されていることを知った。それまでも篠山城刻印符号の質量とともに多いことは知っていたが、採石場は勉強不足であった。それから協議を重ね、詳細分布調査を行ったのが4年後のことであり、さらに3年、合計7年後にやっと報告書を書くようになった。その間、発掘調査は急激に増加し、調査方法も少なからず変化した。しかし、その状況の中でその成果は十分に挙げられたものと思っていた。

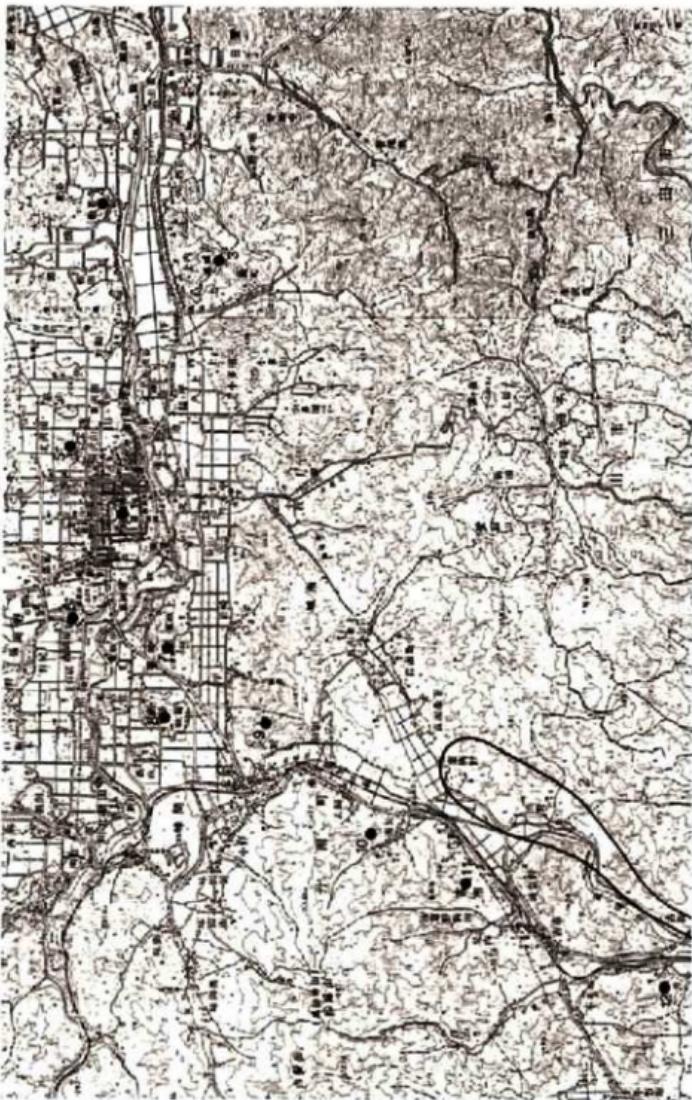
以下、簡単にまとめて、おわりとしたい。

「篠山城採石場」の調査は、数年にわたり不定期に実施してきた。現地立会などで遺構の確認も行ったが、遺構は検出されなかった。そのため、築城関係石材の位置確認と分布図の作成、石材の計測・拓本作業を実施して調査を終了した。

以下、調査結果をもとに2・3の問題点を挙げてまとめとしたい。現地調査・整理調査を通して、朽木史郎氏には多くの教示・指導を得ている。『篠山城石垣符号の研究』を底本として考えを進めており、有形無形な教示の元に本文がなっていることを明記しておきたい。

篠山城築城は「天下普請」として西国大名20侯によって行われたものである。山陰道の京都への入口として要衝の地で、西国大名への押えとなる拠点ではあるが、一譜代大名のしかも5ヶ国の小藩の築城としては異例のことと考えられている。しかし、現存する篠山城の石垣の刻印（符号）の豊富さは、その築城の軽率を如実に語っているものと思われる。篠山城石垣の刻印（符号）の種類・数の多さは特徴的である。昭和62年度の二の丸西面（第21回11面）などの解体修理では、さらに符号の数を増加させており、2面に刻まれている例も確認されている。

『篠山城石垣符号の研究』によると第3回の通りの符号が、1960年段階で確認されている。^{参考} 第3回はこれに石切場（採石場）の今回調査資料を加えたものである。石垣の呼称も同書に従った（第29回）。現状では、隕れた面にも明らかに刻印が存在するという事実だけを記すにとどまり、解体修理に伴う調査報告に期待するものである。新たな事実が出されることと思われる。現右の表面（外側）観察でも際立った符号の多さを示している。ただ、天下普請というだけでは説明されないものを感じる。1つには、6ヶ月という非常に短期間の築城ということも要因として挙げられよう。西国大名の大半は引き続ぎ名古屋城の普請も命ぜられていたことか



1. 鷺山城 2. 鷺山鐵道石場 3. 八上城 4. 稲荷寺城 5. 沢田城 6. 鶴の山城 7. 吹城 8. 鶴出城 9. 大沢城 10. 矢代城 11. 波賀城 12. 海井城
第20回 鶴山城とその隣石場

ら期間が設定されていたものと思われる。名古屋城や明石城も天下普請であるが、築城の期間が長く、また石材の集積も明石城なら明石港内というような領内に限っておらず、広域な石材採取が考えられる。明石城では石材の内蔵部から明石港外の石材が明らかに搬入されている。それに比べて、篠山城内に限って採石されたものと推定される。事実、油井谷では草野の山塊に落石を示す碑が見られる。その内側にしか石材は確認されていない。採石場は山内摩文書にあるように、王地山・熊谷・笠尾・追入・宮田・油井の盆地周辺部から採石していた(第9図)。しかし、現状で考える限り「油井谷」と言われた今回調査した地域が中心であったものと思われる。大名の各丁場の推定は行われておらず、古文書などの史料がないことから、丁場割りの復原は困難であろう。今回調査によっての丁場は地理的に分けただけで、歴史的に意味があるわけではない。しかし、当時の採石にしても地域ごとの分割は当然考えられることであろう。刻印の存在は、そのことを考える上に1つのポイントとなる事実である。早くに『篠山城石垣符号の研究』において朽木氏は、その作業を行っておられる。刻印と助役大名の比較で、丹波国福知山藩有馬豊氏と△、丹後國宮津藩京極高知と○、津山藩森忠敬と◎など14種について推定をなされている。このうち採石場に見られる刻印は△ ◇ ◎ の3種である。◎は草野丁場と当野支群中谷川支群・下山支群に、△は当野支群中谷川支群に、◎は古森丁場に存在する。ただ、3種の刻印が全て単純な記号であることから直接結びつけることは不可能である。大名の略紋と考えるか記号と考えるかに分かれるであろうが、記号とするのが一般的である。

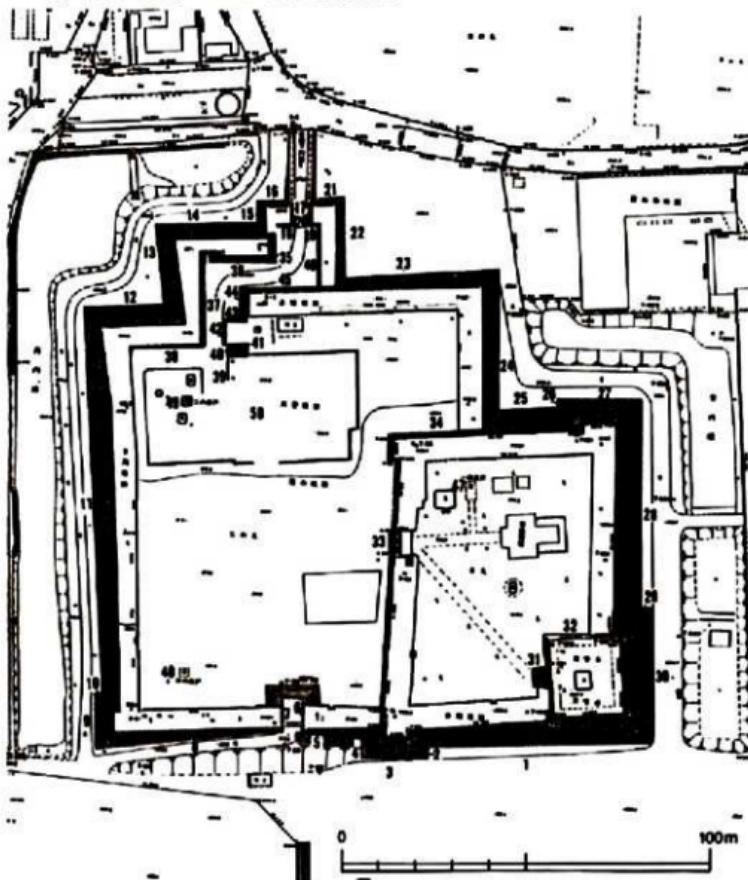
次に符号を打つ時期であるが、採石場で一部については施文しているのは刻印石が残っていることから明らかな事実である。ただ、篠山城石垣に施された多種多様の刻印と比較すると大きく見劣りがする。全て持ち運ばれたとは考えられないで、単純な記号だけの符号が残されたことに全てを採石場で施したとは考えられない。また、刻印石も割石に限られており、自然石はもちろんのこと矢穴を入れた状態の矢穴石も見られない。当野丁場中谷川支群の1石(No.2)と徳円寺支群の2石(No.4・5)、東郷野丁場の1石(No.7)の4石のみが大型の石材で、他は全て小型の石材である。大型の石材でも徳円寺支群の1石(No.4)が最大値で72×72×140cmを測る程度で、全て隅石としては使用出来ない大きさである。篠山城の隅石の値は80×80×180cmを測る他城に比べても、大型の石材を使用している。

刻印石の確認位置は、徳円寺支群を除いて全て原位置を移動した状態で確認している上に、石材が小型の石であることから、採石前の所有を表わす刻印とは考えにくい。しかし、既然と刻印石が存在する以上、採石場での施文は否定できない。大型石材が分布している中谷川支群上流部や、中山支群では圓筒石を嵌石取れる大型の石材があり、中には矢穴を入れた状態で放置された矢穴石が存在するにもかかわらず、刻印が認められない。このことは採石場の施文は採石前ではなく、採石した後集積した段階で刻まれたものではないかと考えられる。丁場・支

群ごとに集積し、そこで大名・作東担当者による符号が刻まれたものではないかと考えている。さらに採石場から篠山城へと運ばれ、石垣築城に際して現状に見られるように多数の施文を行い、普請工事を行ったものと思われる。

* 石の分類は蘿川氏の分類に従うものである。

蘿川祐作「採石場としての岩ヶ平」『兵庫県文化財調査報告第4集』所収の「芦屋・八十駒古墳群 岩ヶ平支群の調査」 1979年 兵庫県教育委員会

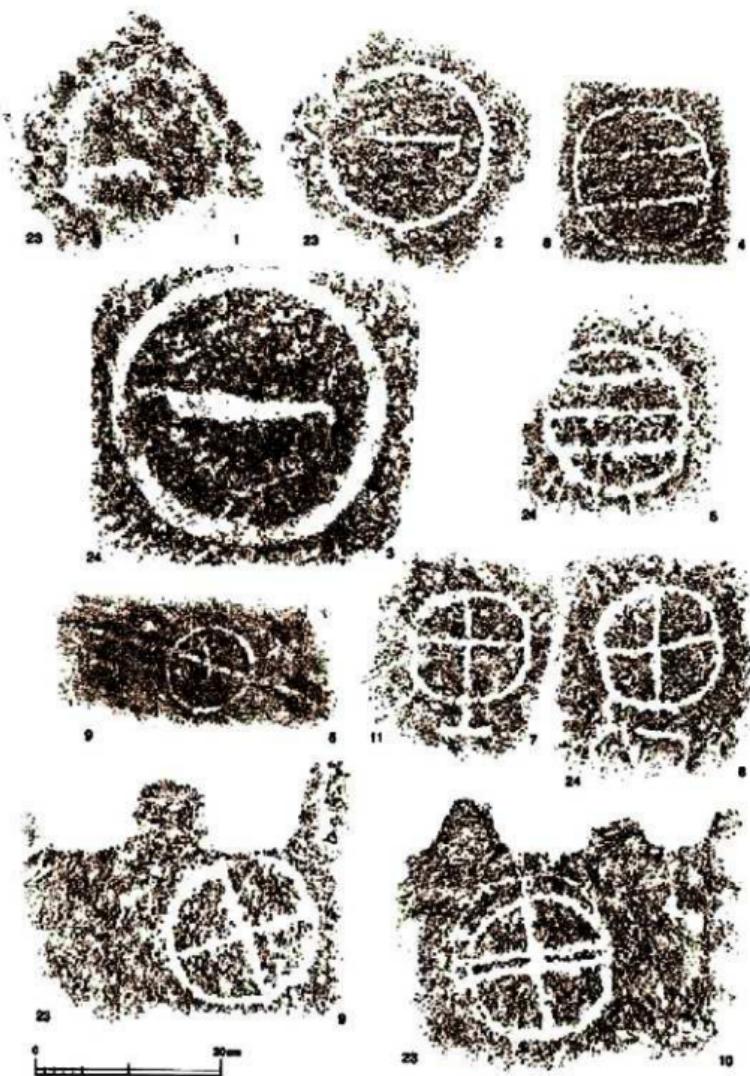


第21図 篠山城石垣の位置

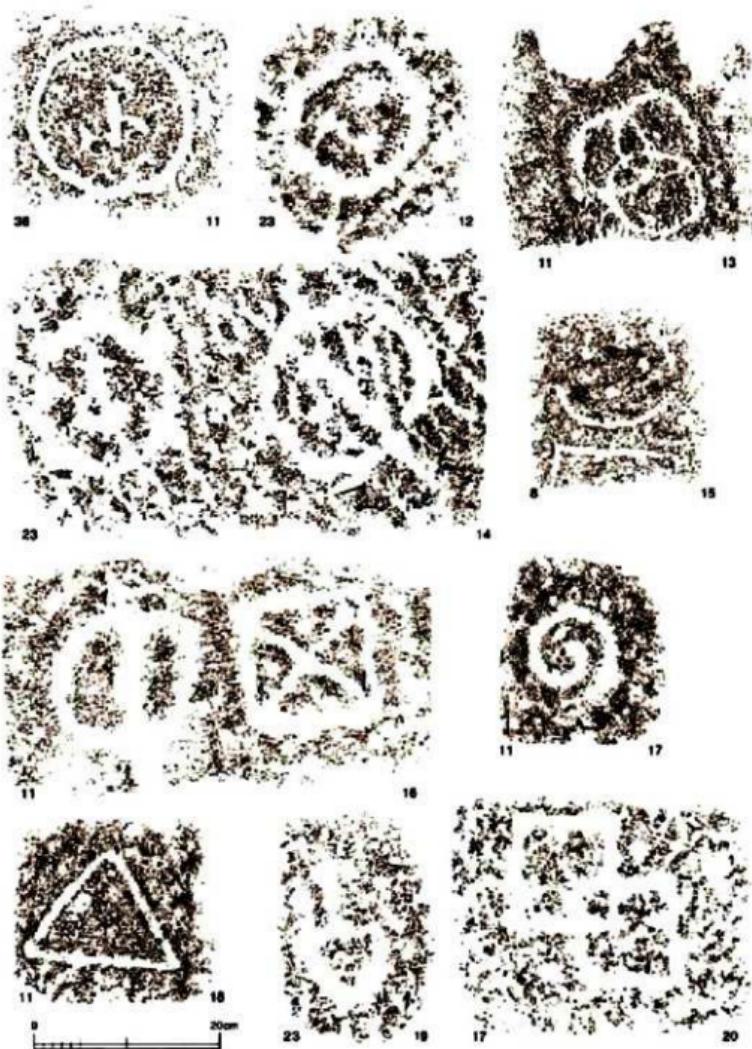
■	⊕	⊖	○	⊖	⊕	九	Q	◐	◑	⊕	□	□	☒	☒
	△	□	田	△	□	田	△	田	田	△	□	田	田	田
1 ■	○	⊕	⊖	□	△	□	田	△	田	★	ヰ	□	□	□
3 ■	○	⊕	⊖	○	○	○	○	○	○	□	田	△	田	田
4 ■	○	△	□	田	田	田	田	田	田	★	田	田	田	田
5 ■	⊕	⊖	○	○	○	○	○	○	○	○	田	田	田	田
6 ■	Q	△	○	○	○	○	○	○	○	○	田	田	田	田
7 ■	田	○	○	○	○	○	○	○	○	○	田	田	田	田
8 ■	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田
	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田
	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田
9 ■	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田
	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田
11 ■	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田
	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田
	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田
	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田

第 3 表 福山城石垣・御石場刻印一覽表

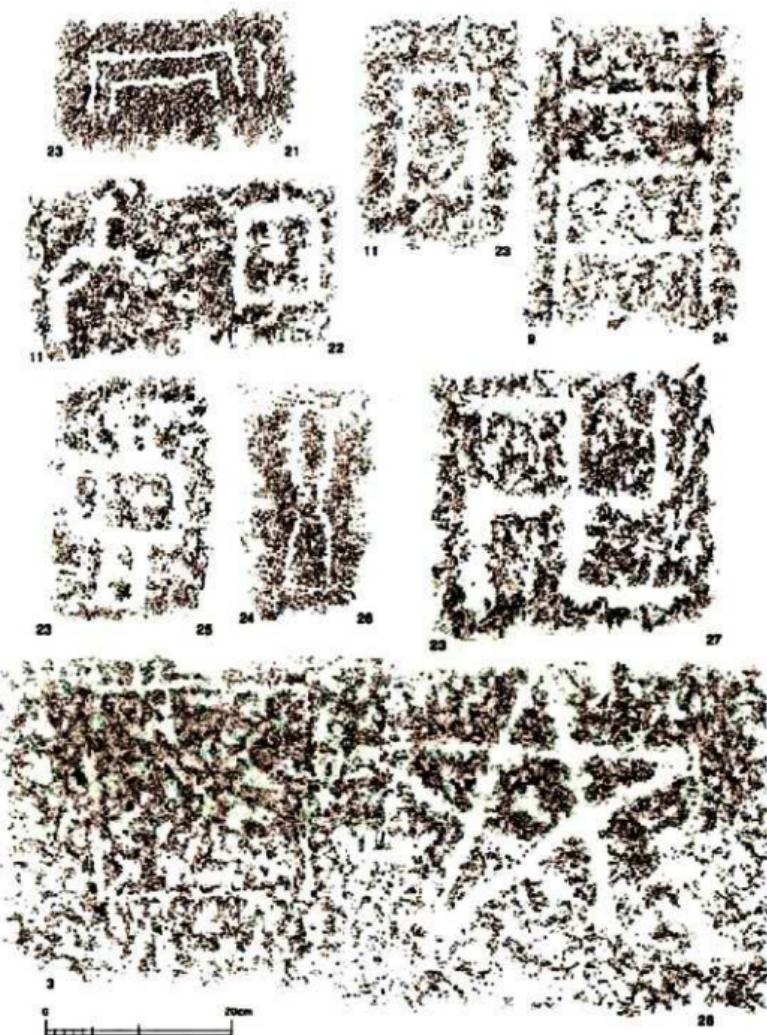
- 30面     
- 31面        
- 32面       
- 34面 
- 35面   
- 36面    
- 37面 
- 38面 
- 39面 
- 40面  
- 41面 
- 42面   
- 44面 
- 46面 
- 47面 
- 49面  
- 50面  
- 51面  



第22図　松山城石板の刻印石本(I)
(左下の数字は第22図の面数)



第23図 鶴山城石塁の刻印拓本図



第24図 猪山城石垣の刻印拓本図

蘿山城採石場に足を踏み入れてから7年の年月が経った。最初、小雪の舞う木枯らしの中、見た景色は田園情緒を十分に残す典型的な丹波の風景であった。しかし、報告書を書いている現在、近畿自動車道の工事もほぼ終え、使用開始を待つ状況になりつつある。

丹波の田園風景から高速道路へと大きな変化を遂げた地域であるが、中谷川などを上流に遡るとまだまだ石材が散布しており、旧態を示してくれる。また、最初は不定形の水田であったのが、農業基盤整備によって方形に整備され、直線の道路も敷設されている。電柱も新しく建て替えられていたが、電線から飛びたったハシボソカラスは相変わらず大きな声で鳴いていた。屋鳥ではなく、電線のカラスは過去へと回想させる役目を果たしてくれた。时限を越えた存在のような気がし、旧温泉跡へと向かうと時間を忘れさせてくれたが、すぐ自動車道のカルバートボックスによって現実に呼び戻される。当野にあった石材も散石を除いて当野ではなく、川代体育馆や西紀サービスエリアに移動して社会教育資料として活用されている。今は看板だけで存在さえも忘れるが、村末蘿山城石垣構築の石材の需給関係などから考えても、重要度が認識されることを願うものである。蘿山城石垣の刻印調査を行っていた際、地元中学・高校生が興味を示してくれ、また社会科の一貫として実際に生徒が刻印の確認を行っている場面に遭遇した。このように地元をはじめとして社会教育資料として認識され、活用されることを願うものである。



第25回 蘿山風景

〔付記〕

本報告脱稿後、芦の芽グループ藤川祐作氏から丹南町波賀野の酒井勇宅に刻印石が庭石として保管されているという教示を得た。それゆえに、ここに付記としてその概要を報告するものである。

刻印石は7石確認されており、第27図の写真の通りである。早くに庭石として当野方面から運ばれたものである。神円寺支群の可能性が高いものと思われるが断定は出来ない。ただ、この調査によって、新たに設定しようと考えている波賀野丁場の存在が確認され、その波賀野丁場の石材も含まれているかもしれない。

刻印石は風化や後世の改変が一部見られるが、すべて割石である。立体感のある石材もあるが調整石になるものはない。矢穴列は1列しか見られず、矢穴の大きさも他の丁場のものと同一である。3石には刻印が2種打たれている。そのセット関係は、猿山城石垣や当野丁場中谷川支群にも見られるものである。最も大きな石材で、最大長1.65mを測る。

それに併せて中山北東側の武庫川右岸一帯の分布調査を実施した。比較的緩斜面な部分で深い谷がその間に形成されている。対象は武庫川に架かる岩鼻橋から波賀野までの地域である。その間の山麓・谷部を調査したところ、波賀野墓地から出雲神社に至る地域で石材が確認され



第28図 波賀野丁場の範囲



1



2



3



4



5



6



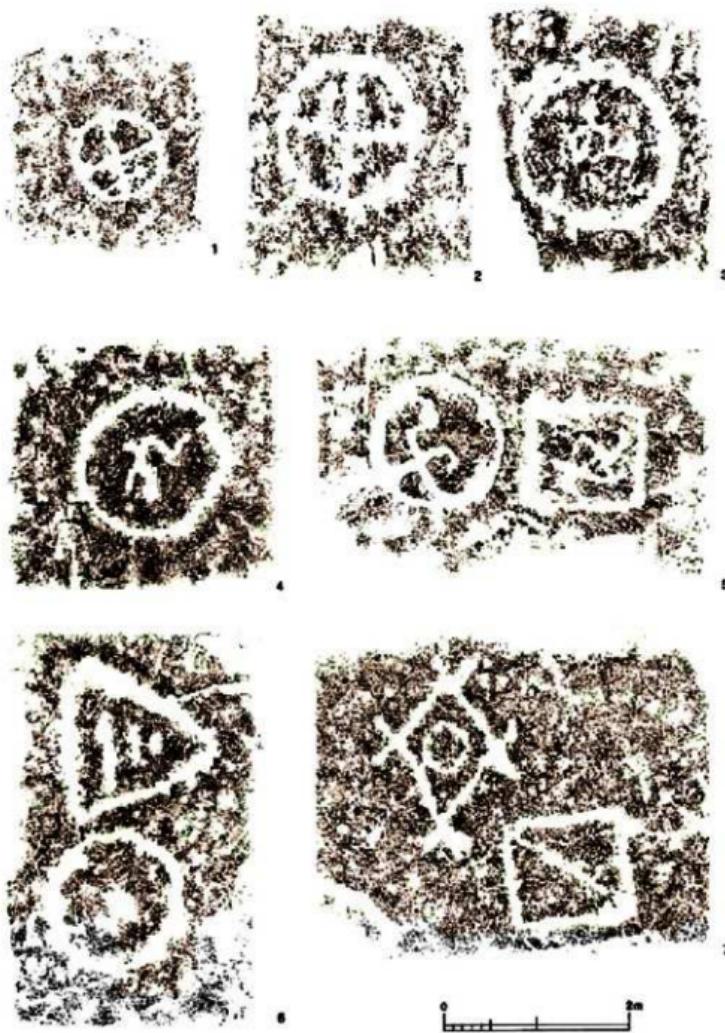
7



8

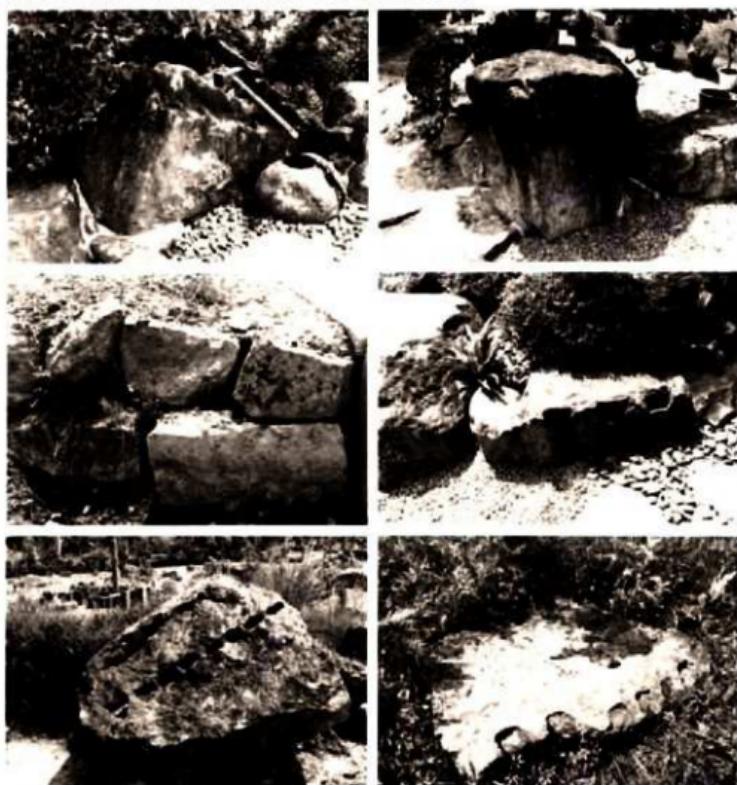
1~7 酒井氏古窯 8 技賀野墓地 (8は藤川氏撮影)

第27回 政賀野丁場 刻印石



第28圖 漢翼等丁場刻印拓本

たが、刻印石は認められなかった。しかし、藤川氏が調査した際には○の刻印が割石の木口面に見られたことであるが、墓地整備によって所在不明になっている。墓地では転用材として築城関係石材が多數使われている。12~15cm幅の矢穴の残された割石が多数で、調整石になるものも散石見られる。また、墓地谷部を上方へ登ると矢穴の残された割石が散布しており、露岩も矢穴列は確認していないものの散見される。それらの諸要素から考えて当地域一帯を一つの丁場として理解出来ようかと思われ、波賀野丁場と呼称したいと思う。ただ、採石の中心は当野丁場中谷川支群・他円寺支群であろうと思われる。これにより、丁場が増加し『油井谷』の採石がさらに多く頃出されたことが理解されよう。



第29図 波賀野丁場矢穴石・刻石



森山城採石場遠景（北から）



森山城採石場遠景（南西から）



草野丁場（西から）



草野丁場（現況、南から）



草野丁場 石材の雲頭



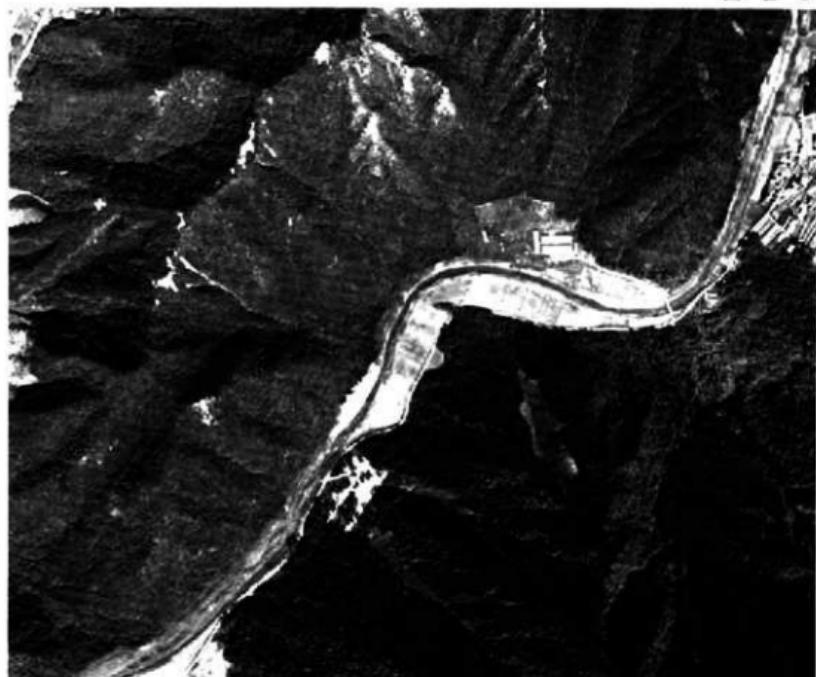
草野丁場 石材散布状況



古森丁場 空中写真



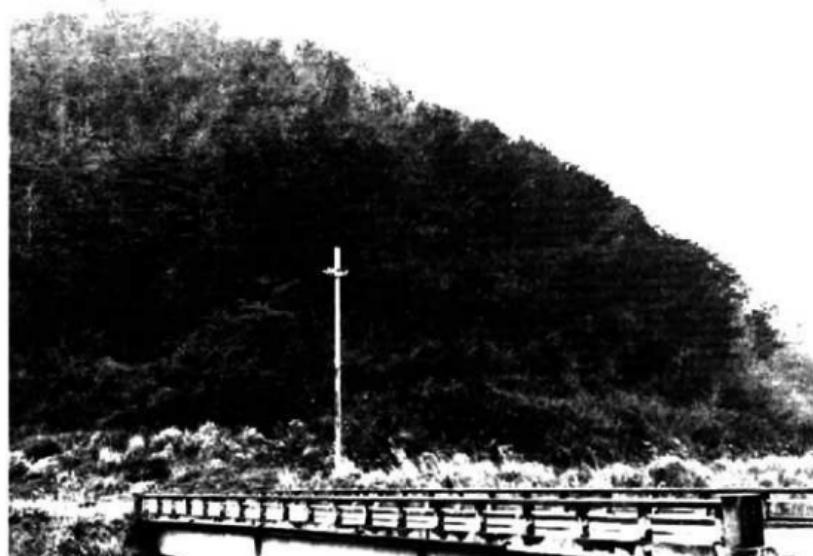
古森丁場 石材散布状態



当野工場 中山支群・下山支群空中写真



当野工場 下山支群全景



当野丁場 中山支群延景



当野丁場 山口支群湖盤石



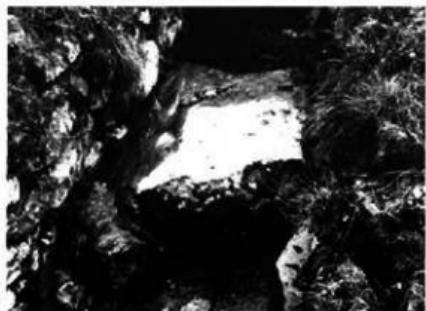
当野丁場 中谷川・徳円寺支群空中写真



中谷川支群 石材散布状態



徳冨寺支群 遠景



中谷川支群 転用石材



西紀サービスエリア石材展示風景



路線内石材 (1)(2)



西紀サービスエリア石垣石材の矢穴



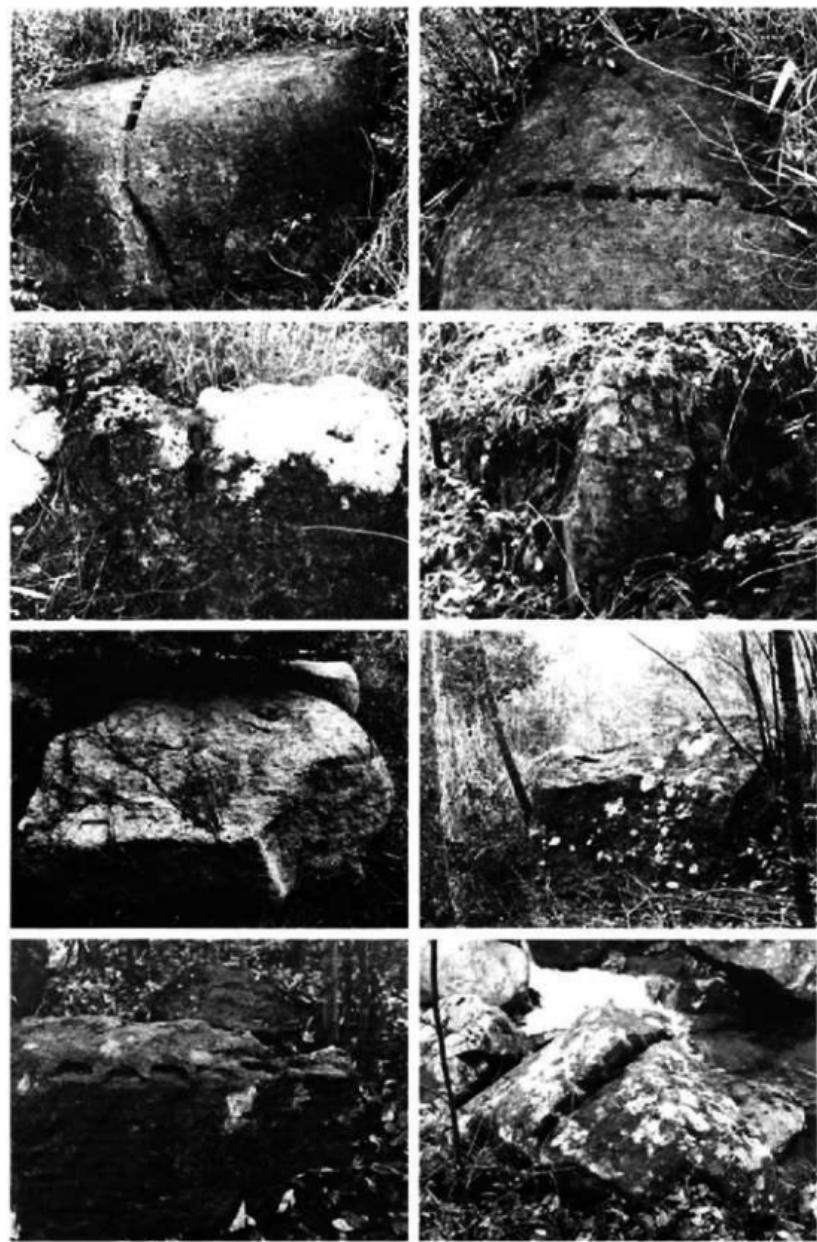
路線内石材 (4)



路線内石材 (5)



中谷川支群 石材



中谷川支群 石材



路線内石材 (1)



路線内石材 (4)



路線内石材 (3)



路線内石材 (2)





丹南町川代体育馆庭に移動された石材



栗柄野丁場空中写真



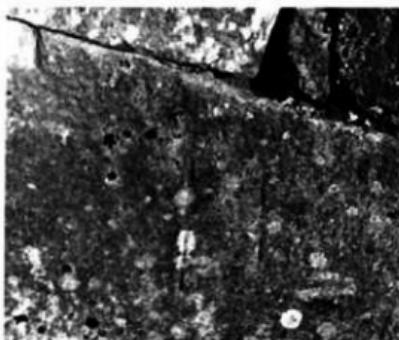
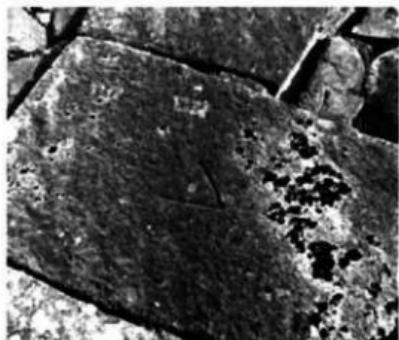
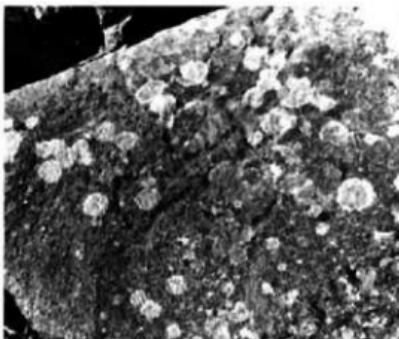
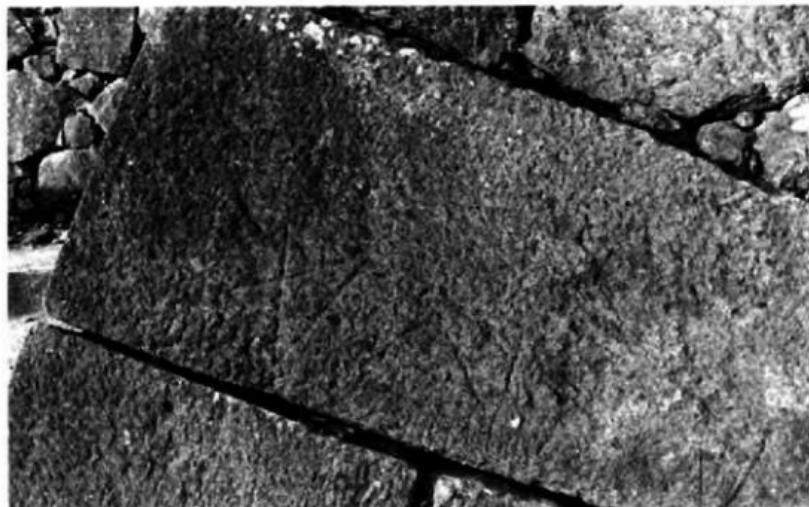
栗柄野丁場 印刷



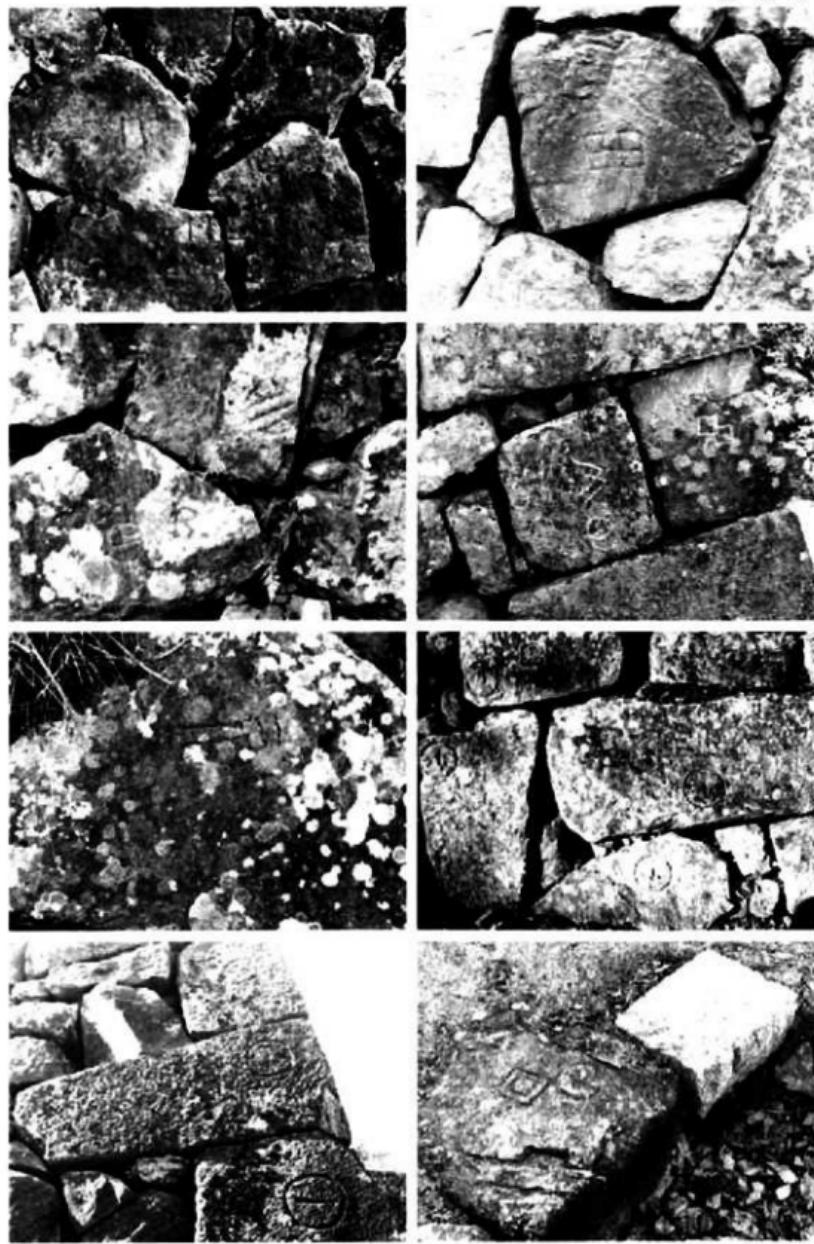
栗柄野丁場 近景



栗柄野丁場 転用石材



篠山城石垣の刻印



篠山城石垣の刻印

兵庫県文化財調査報告 第57冊

1988年3月31日

篠山城採石場

発行 兵庫県埋蔵文化財調査事務所
〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5
TEL (078) 531-7011

発行 兵庫県教育委員会
〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10-1
TEL (078) 341-7711

印刷 株式会社 精文舎
〒652 神戸市兵庫区下沃通5丁目2-18
TEL (078) 575-4729
